21世紀への遺産

熊本の文化財を語る

御座船に導かれた歴史との出逢い。

㈱ニュースカイホテル
代表取締役副社長
杉田　辰彦さん

徳川家康・上杉鷹山など、戦国の世において、並はずれたリーダーシップを発揮した賢人たちは、現代社会では、ビジネスマネージメントの範としてジャーナリズムにも注目され、多くの出版物が刊行されています。

彼らの示した洞察力の鋭さ、判断の早さ、ずば抜けた行動力は、現代の経営戦略上、かなり参考となり得ます。ただ、彼らに特有な環境、特に地域性等については充分に検討しなければならないのではないでしょうか。

そういった意味で、ここ熊本に住む者にとって、三百年に渡って目をみはる統率力を発揮した細川家は、経営戦略を考えるうえで、様々な教訓を残してきたといえます。

私が、細川家の歴史に興味を持つようになったのは、熊本城の天守閣に展示してある御座船「波奈之丸」を初めて見てからです。芸術品の名に値する、天井に描かれた彩色の草花図のすばらしさ。その美しさに思わず目を奪われてしまいました。

私がことあるごとに熊本城へ足を運ぶようになったのは、それからなのです。この「波奈之丸」は、細川家が参勤交代の折、豊後鶴崎から大阪まで海路乗用したもので、江戸時代末期の藩主御座所の姿をよく残している稀有な遺構であるというのも、魅力のひとつでしょう。

毎年、春と秋に県立美術館で催される「永青文庫展」も、私にとって見逃せない催しとなっています。こうして、私の趣味もしだいにエスカレートして、遂には、ホテルにまで細川家の歴史を持ち込むようになりました。一昨年、高層二十五階のシティホテルとして生まれ変わる時、一階ロビーのティラウンジに、永青文庫所蔵の「水前寺成趣園之図」を模した壁画をかけました。

この一枚の絵がホテルを訪れる多くの人たちに感動を与え、熊本ファンが増えることを願っています。

波奈之丸（なみなしまる）――細川家舟屋形

「波奈之丸」は、旧熊本藩主細川氏が、参勤交代のため、豊後の国（大分県）鶴崎より大阪まで使用した御座船である。

現在、熊本城天守閣に展示されている舟屋形は、その御座所部分で、国の重要文化財に指定されている。

細川家二代の忠興が豊前中津で建造したのに始まり、度々の修造があったが、天保五年（一八三四）火災で焼失後、天保十年（一八三九）には再建された。

この舟屋形は、主室と次の間に分かれた一階と、板敷きの一室である二階部分とからなる。一階の天井は格天井で、格縁を黒漆塗とし、主室の格間には彩色で花草木を、次の間には薬用植物を描くなど美麗な装飾がなされている。また、二階の天井は、板天井で木部を朱漆塗りとした軽快な意匠を持っている。

明治四年、廃船後鶴崎で解体された際、御座所だけが残った。当初、個人所有となっていたが、大正十年再び細川家により保存されることになった。

心のふるさと民話とわたし

鬼池のあわて者

●感想文
五和町立鬼池小学校
6年　津口　理奈さん

●感想画
6年　山下　美保さん

私は、この題名を聞いた時、どんなあわて者なんだろう、とどきどきしていました。

かまを海に落とした時、あわてて船にきずをつけるところが、子供のようで、たまらなくかわいく思えてきました。

私は、鉄五郎たちはなぜ熊本に魚を売りに行こうとしたか、考えてみました。それは、昔の鬼池は貧しく人口も少なかったからだと思います。

それにしても、同じ天草の高浜を唐の国とまちがえるなんて、よっぽどのあわて者だと思いました。

それでも、鉄五郎たちは、みんなを楽しませ、みんなから親しまれ、愛されていたのではないかと思います。

私も、明るく、大らかに生きていこうと思います。

「鬼池のあわて者」あらまし――

あわて者というのは、どこにもいるものだが、昔、天草の五和町鬼池に住んでいたという鉄五郎と義八はあわて者というだけでなく、人間味あふれるひょうきん者だったそうな。

二人は、漁をして暮らしていた。ある日のことだった。漁が一段落して、粟飯でも食おうということになった。義八は潮水で粟を研ぎ始めたまでは良かったが手がすべって、釜は海の中へ落ちてしもうた。困り果てた様子の義八に、鉄五郎は、これぞ名案とばかりに「早う、釜の落ちた所の舟べりに印をつけんと、港に着いてからわからんようになる。」と悟すように言うと義八は納得し、早速鉈で舟べりに傷をつけて、安堵の胸をなでおろした。一事が万事こういった調子で、全くひょうきんなものである。

この二人が、対岸の島原の近くまで、漁に出かけた時のことだった。思いがけない大漁に、鬼池では到底売りきれんと思った二人は、肥後で売ることにして、一路、際崎（三角港）へと向った。ところが夕暮れ近くなると、穏やかだった海もにわかにしけ、風向きも変わって、舟はどんどん反対側の天草灘の方へと流され始めた。風も波も増々激しくなって、もう生きた心地などしない。

でも、義八はやさしい男だ。「風さえ凪げば唐の国でも着くけん、弱気になるな。」と言って、おびえる鉄五郎を力づけるのだった。

さて、悪夢のような一夜が明けて、漂着したのは、長い〳〵砂浜だった。二人は、もうてっきり唐の国に着いたと思い、命が助かったのを喜び合った。しかしそれも束の間、どうも様子がおかしい。

何のことはない、ここは、同じ天草の高浜だった。二人の勘違いに気づいた村の人たちは大笑いしてしまった。このユーモラスなあわてんぼうぶりに、村人たちも親しみをもったのか、ごちそうをしてもてなしたそうな。あわて者もここまでくるとほほえましくさえ思えてくるというお話。